

おおさか
KEY
ワード
第44回



日本画の乗り板にのって、絵筆をとり制作中の成園

《祭りのよそおい》の心理劇

似た思い出はありませんか？

女絵師女うたびとなど多く

浪華は春も早く来るらし

吉井 勇

浪華の春とくれば「古今和歌集」仮名序の「難波津に咲くやこの花冬ごもり 今を春べと咲くやこの花」が浮かぶ。それも匂わせた歌だろう。道頓堀の賑わいや築港の夜釣りなど、京都大阪の夜の風物をテーマに文豪やジャーナリストの随筆、紀行文を集めた大正9(1920)年刊行『夜の京阪』(文久社出版部)に吉井勇が発表した「浪華百首」の一首である。

無粋ながら吉井の歌の意味をくだいて記すと、大阪出身の女性の画家や歌人がたくさん活躍している、浪華の女性は多感な思春期を早く迎えるようだといったところか。大阪ゆかりの「女絵師」「女うたびと」といえば誰だろう。歌人は与謝野晶子(1878~1942)、石上露子(1882~1959)が浮かぶ。女性画家なら、島成園(1892~1970)、木谷千種(1895~1947)、生田花朝(1889~1978)が代表的だ。

大阪の女性画家らしい個性的な作品を紹介しよう。大正2(1913)年の第7回文部省美術展覧会で入選した島成園《祭りのよそおい》(大阪新美術館建設準備室蔵)である。祭の幔幕を張る豪家の店先の縁台に、晴れ着を着飾った三人の少女が座っている。右端には立った少女が一人。一見すると楽しい祭りの少女たちを描いた、典型的に言えば「乙女チック」で愛らしい作品に見える。しかし、この絵にはある意味、残酷なストーリーがある。

たとえばこの四人の家庭環境はどんな状態だろう。着物や草履、扇子などから見て左端の少女が最も裕福であり、順に経済力が落ちていく。三番目の絞りの子どもは、どことなく左の裕福な少女たちに媚びを売って

いるように見える。右端に立つ少女は着物も粗末で、裕福な少女たちをジッと見つめ、それも横向きで目しか描かれていない。

この絵のテーマは、少女たちの可憐さではなく、子どもの世界に投影された大人社会の格差、残酷な現実社会の姿である。成園は堺に生まれ、船場にも道頓堀にも近い大阪市南区鍛冶屋町(現中央区島之内)で成長した。《祭りのよそおい》の心理劇は、とりわけ大阪都心の日常風景だったはずであり、男性の画家ではなかなか思いつかない発想である。あなたなら、これまでの人生をふりかえって、四人の少女の誰が一番共感するだろうか？

しかし、十数年ほど前までは大阪でも地元の女性画家たちの存在は忘れられていた。大阪の文化的プライドの一翼を担う彼女たちの復権に力があつたのが、大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室(現、大阪新美術館建設準備室に改称)である。美術館はいまだ建設されないものの、二十年に渡って各所に会場を借り、大阪画壇の発掘と顕彰を重ねてきた。4月には、難波の高島屋で「きらめく日本画コレクション」(4月2日~14日、主催 大阪市、産経新聞社)を開催し、大阪市が誇る大正・昭和の日本画の名品を一堂に展覧するという。成園への関心は生地でも高く、堺市立文化館でも「島成園と近代大阪女性画家」展(3月12日~16日)が開催される。

本来はもっと長い期間、展覧会は開いて欲しいが、高島屋では《祭りのよそおい》のほか千種や花朝の作品も出品されるので、御覧になったことのない方は、アートの世界での「浪華の春」を探りに足を運ばれることをお奨めしたい。